



Dhampir

SIMA

プロローグ

夜の闇が辺りを怪しげに魅せる

ここはギルトンという寂れた町。

人影は何も無い。

怪しく風に揺れる木々が恐怖を煽る

そこに立つ一人の男。

いったい何者なのか。

『Dhampir』

ダンピール

寂れた町

「ねえ、聞いた？ あの噂・・・」

「聞いた、聞いた。Dhampirでしょ？」

「そうそう。夜の闇に紛れてどこからともなく現れるっていう」

「でも聞いた話じゃあすっごい美男子っていうわよ」

「本当に？そうだったら一度合ってみたいものねえ」

「やめときなよー。どっかに連れてかれるっていうじゃない！」

「それがいいんじゃない。」

「あははは(笑)」

《ばっかみたい。年増の女ってこうゆう噂は好きなのよね》

町の女の間ではDhampirの噂が持ちきりだった。

しかし、一人だけ噂を耳にも入れない娘がいた。

その娘 娼婦

自らの体を男共に売り払い金を儲ける女たち。

娼婦。

その中にひと際他の女とは明らかに歳の差がある娘がいた。

その娘こそが、Dhampirを信じていないジュリアという娘だ。

ジュリアは、15歳でこの世界に親戚の伯父に入れられた。

母親はジュリアが10歳の頃、病に倒れ帰らぬ人となった。

父親は、妻が亡くなると働く気力も生きる気力も無くし
酒に溺れ、ついには首を吊って死んでしまった。

両親を亡くしたジュリアは、酷く悲しんだ。

伯父はジュリアに目もくれず、ジュリアを厄介払いし
15歳というまだ幼さの残るジュリアを娼婦という辛い世界に入れた。

ジュリアは必死に許しを扱いたが伯父は耳をかさずに嫌がるジュリアを売ったのだ。

孤独

ジュリアは最初は絶望のあまり周りの者と口も利かず食べ物も食べずただ流れに身を任せるだけだった。

もう、どうなったっていい。

私はこのままこの牢獄のような中で一生を過ごし年をとるまでずっと悲劇の中で苦しむんだわ。

ジュリアは毎日泣いていた。

悲しくて、辛くて、悔しくて。

自分が知りもしない男たちによってどんどん汚されていく。

自分は汚れている、すでに・・・・・・。

来る男たちはどれも既婚者や恋人持ち。

金を持ってるだけの根性悪おやじ

恋人と喧嘩をして慰めてくれという男

どうしようもない奴等ばかり。

ジュリアは、そんな男達の相手をしていくうちに性格も考えも変わっていった。

15歳の頃の初心で純粋なジュリアはもういない。

今のジュリアは、何も考えることをしない。

希望も夢も持たない。

ただ毎日男の相手をするだけ。

相手に合わせて、流れるままに流れてく。

ジュリアは他の娼婦の女たちより何倍も指名が多い。

母親譲りなのか、ジュリアは来るもの誰もが認める美しい娘だった。

腰まで伸びた金色の髪、くっきり大きなスカイブルーの瞳、すらっとした長い手足、高く筋の通った鼻。

しかし、外にあまり出ないジュリアは、18歳になった今、恋人もいない。
恋人という存在自体を知らないのだ。

頼れる両親も友達も親戚もいない。

信じれるのは自分だけ。

人なんて簡単に信用しない。

噂なんて形のないもの無いも同然。

死ぬことなんて、怖くない。

今のジュリアは、ただ生きている。

ただそれだけ。

闇

雪が降り続くある日。

奴が現れた。

「キャ—————!!」

闇の路地に甲高い悲鳴が響く。

女の目の前には・・・釘で心臓を打ち抜かれ、目をくり抜かれた血まみれの男の遺体があった。

そのすぐ傍に立ちつくす男。

カラスのような黒い髪、瞳は赤く、2mはありそうな背丈に整った顔立ち。

電灯でかすかに見える肌は恐ろしく白かった。

その白い顔は血で染まり、手には男の目玉が無残に神経が垂れ下がり握られていた。

女は、目の前の光景に後ずさりした。

「も、もしかして・・・ Dhampir・・・」

『その通り』

噂を知っていた女は、この男がDhampirだと悟った。

女性の目を焼きつかせるような眼力で男は歩み寄る。

「な、何をやるの・・・!? 私に・・・」

女は恐怖で言葉が出ない。

男は女の目の前に立った。

「俺に何をされて欲しい？この男のように心臓の鼓動を苦しみながら止められるか、その美しい瞳をちぎり抜かれて欲しいか・・・それとも・・・」

男は耳元で囁いた。

「死ぬまで犯されるか」

女の血の気が引いた。

と思ったらその場で失神して倒れてしまった。

「タイミングが悪かったな。」

男は微かに口元に笑みを浮かべると女を見下し、その場を後にした。

無残に心臓を打ち抜かれ、目玉を無くした男の遺体は
不思議と闇間に消えていた。

まるで、そこに無かったかのように塵となり消えていた。

愛撫

Dhampirは、人通りの無い路地を歩いていた。

そこはジュリアの居る娼婦の店「マドレーヌ」のある路地だった。

ジュリアはちょうど窓から外の景色を眺めていた。
でも見えるのは隣の店との間の道だけ。

「ホント退屈。今日は良い男も来ないし。」

気持ちが沈んでいたジュリアの目に飛び込んで来たのは
あのDhampirだった。

風を切るように歩くDhampirの姿はジュリアの目にくっきり映った。

《久々の良い男発見! どれどれ、顔良しスタイル良し。文句無しの美形だわ》

こんなチャンスは無いとばかりにジュリアは男に声をかけた。

「ちょっとそこのお兄さん!」

Dhampirは突然呼ばれたことに少々驚いたが声が聞こえた方に視線を反らした。

「お兄さん良い男ねえ。ちょっと寄ってかない?」

《何だこのガキ》

Dhampirには美人のジュリアもまだまだ子どもに見えた。

「お前みたいなガキが何でそんな店にいるんだ?」

ジュリアはその言葉にムツとした。

「あら、言っておくけどあたし、いろんな男と経験してんだからね。もうガキじゃないわ」

《生意気なガキだな》

Dhampirは、ジュリアの言い分を無視し通り過ぎようとした。

「ちょっと、あなたもしかして、まだ未経験の童貞くんなわけ??」

その言葉にDhampirは何かかがプチっと切れた。

《言わせておけばつくづく頭に来るガキだな・・・ちょっと脅してみるか》

Dhampirは、店の前にまた戻ると入口に足を向けた。

そして、ジュリアの元へと来た。

「hello、色男さん」

ジュリアの目から近くで見たDhampirはかなりの美男子だった。

「ねえ、何か喋ってよ。あたし退屈してるの。それとも・・・する？ きゃっ」

ジュリアが喋り終わる前にDhampirはジュリアをベットに押し倒した。

首筋に軽く愛撫し、ジュリアの口を押さえながら上半身に手を滑らせる。

ジュリアはDhampirの目を見た。

ジュリアは足をバタつかせもがく。

口から手を離すと熱い吐息が漏れる。

すかさず吐息を消すかのように唇を重ねる。

熱い吐息が体の体温を上げる。

《この人、何なの？・・・乱暴なのに・・・優しい》

ジュリアはDhampirの首に両手を回して愛撫を求める。

しかし、Dhampirは急にジュリアを突き放した。

「どうしたの？」

ジュリアは何か物欲しそうな目でDhampirを見つめる。

「お前、何でこんなところで働いてるんだ？」

Dhampirは服を整えながらすかさず、ジュリアに質問する。

「何でって・・・」

急にジュリアの顔が曇った。

「伯父に売られたのよ。15歳からずっとここに居るわ。」

ジュリアは乱れた髪をまとめながら自分の生い立ちをDhampirに語った。

「あたし、両親はいないの。2人ともとっくに死んだわ。母は病気で、父は首を吊って自殺したの。

身寄りの無いあたしは親戚の伯父の元に行ったの。でも伯父は相手にしてくれなかった。そしてあたしを15歳でこの店に売ったのよ。」

淡々と喋るジュリアにDhampirはまたも質問した。

「名はなんというんだ？」

そう言いながら持っていたポケットからクシャクシャになった煙草を取り出し火をつける。

「あら、人に聞く前に自分が名乗れば？」

強気なジュリアにまたもむかっとする。

「噂を聞いたことが無いか？ Dhampir・・・」

「ああ、Dhampirっていう奴の噂？ あたし噂とか信じない主義なの。だって、本当かどうか何て誰にもわからないじゃない。」

「それが俺だ。Dhampir」

「あはははw 嘘でしょ？ 冗談キツイよ(笑)」

無言で顔色ひとつ変えないDhampirにジュリアは答えた。

「じゃあ、あなたの名前はDhampirなの？」

Dhampirは煙草の煙をフーッと吐くとジュリアを見た。

「俺の名は、ルシヴァ。」

「ルシヴァか。良い名前ね。でも、どうしてDhampirって呼ばれてるの？」

ジュリアは不思議に思った。

怖い素振りひとつ見せないジュリアにルシヴァは答えた。

「お前、俺が怖くないのか？」

するとジュリアは当たり前のように答えた。

「だってあなた、根は優しいそうじゃない(笑)」

ジュリアの言葉にルシヴァは少し戸惑った。

《何考えてやがんだこいつ……》

過去

「Dhampir、ヴァンパイアと人間の間生まれたもの。それが俺だ。」

ジュリアは言葉を疑った。

「ヴァンパイア・・・？でもあなたどこからどう見ても人間じゃない。」

「Dhampirは普通の人間と変わらない、しかし生まれながらにヴァンパイアを殺すという宿命を持っている。

父も母もヴァンパイアに襲われた。父は全身の血を一滴残らず抜き取られ、母は、ヴァンパイアに

犯され、俺を孕んだ。」

ルシヴァは、不思議とジュリアに自分の過去を話した。

—7年前—

当時17歳だったルシヴァは、森の中の小さな小屋で母親と二人で暮らしていた。

何も無いところだったが、生活は充実していた。

しかし、母からはいつも、この森から出てはいけない。絶対村に行ってはいけない。と言われた。

17歳のルシヴァには何のことだかさっぱり分からなかった。

自分がヴァンパイアとの間に生まれたとも知らずに、17年間この森で生きていた。

母は息子に辛い思いをさせたくないばかりに、そのことはずっと秘密にしておいた。

しかし、それが悲劇を呼んだ。

ルシヴァは母からの言葉を破り、村に出てしまった。

村の者は、ルシヴァを見るなり、ヒソヒソと話をはじめた。

『あいつはもしかして、ヴァンパイアの子どもじゃないか・・・？』

『あのカラスのような真っ黒な髪、うさぎのような真っ赤な目』

『間違いない・・・すぐに始末しなければ』

ルシヴァが道を歩いていると、一人の老人が声をかけてきた。

「おい、そこの若いの。悪いことは言わん。今すぐ帰れ。そして二度とここに来てはならん。」

ルシヴァは老人の言葉に疑問を持った。

何言ってんだ??

しかし、ルシヴァは夜になっても家には戻らなかった。

帰った頃にはすっかり、明け方になっていた。

「やべー。さすがに怒られるなあ」

ルシヴァは走って家に帰った。

「かあさん、ごめん」

バシッ

ルシヴァは初めて怒り狂う母親の姿を見た。

「ルシヴァ!あれほど村へは行くなと行ったのに!どうして!」

母親はその場に泣き崩れた。

「ごめん。かあさん。どうしても村に行きたくて・・・」

「ルシヴァ、良く聞いて。あなたは普通とは違うのよ」

え．．．．？

「それ．．．どうゆうこと？」

「今まで秘密にしておいたけど、あなたはヴァンパイアとの間に出来た子どもなの」

「え．．．．．。」

《ヴァンパイア．．．．？》

「だから、ルシヴァ．．．．

バタンッ！

その時、突然扉が開いた。

「こんなところに隠れてやがったのか。この魔女め！」

それは村人だった。

村人はルシヴァの後をついて来ていたのだ。

「もう、逃がしはしねえよ。おとなしく死んでもらう。」

村人はルシヴァに拳銃を向けた。

「ルシヴァ！」

バンッ

心臓からドクドクと血が出る。

それは母の血だった。

母はとっさにルシヴァをかばったのだ。

「ヒッ．．．．かあ．．．さん」

ルシヴァは突然の出来事に混乱した。

「うあああああああああああああ」

気づいたら、自分の手は血で真っ赤に染まっていた。

自分の母親を殺した、村人を混乱状態の中殺してしまった。

村人の口からはドバドバ血が吐き出る。

「ヒッ．．．．たすけ．．．て．．．くれ」

喋るたびにヒューヒューと息が漏れる。

ルシヴァの目からは涙が止めどなく溢れる。

「誰が助けるか。お前は俺の母さんを殺したんだ．．．．許さねえ！」

バンッ

ついには、村人が落とした銃で村人の頭を打ってしまった。

この瞬間、ルシヴァの中にあった憎しみが一気に込み上げた。

死んだ母親を担ぎ、森の中に埋めた。

一輪の花を添えて。

家は、跡形もなく、燃やし、その証拠を消した。

それからのルシヴァは、町を転々と歩き、一つの図書館を訪れた。

そこで自分が何者であるかを知った。

ヴァンパイアへの恨みが、ルシヴァを変えたのだった。

次々に現れるヴァンパイアを殺し、それが噂を広めた。

彼にはもうヴァンパイアを殺す道以外考えられなくなっていた。

運命

ジュリアは過酷なルシヴァの現実に言葉を無くした。

「俺は生まれた時から、人間だけど人間じゃない。」

「死にたいって、思ったこと無い？もう何もかもがどうでも良くなってきて」

ジュリアは何度も死にたいと思っていた。

一生男たちに遊ばれるくらいならいっそ死んだ方がマシだと。

ルシヴァは、そう言うジュリアに哀れささえ覚えた。

「俺は、死んでも同じことだ」

死んでも同じこと？

「どうして？」

ジュリアには良く分からなかった。

死んだら全てが終わり楽になれるのに・・・。

「俺はDhampirとしてこの世に生まれた。Dhampirは死んだら・・・ヴァンパイアになる」

《え・・・？ヴァンパイアに？》

ジュリアは茫然とした。

「ヴァンパイアになった者は、再び家族の元へと戻り自分の子を孕ませる。

しかし俺に家族はもういない。次に誰が俺の犠牲になるか自分でも分からない。自分の母親のような

運命は・・・残酷すぎる。」

ルシヴァは、母親のあの悲劇を思い出し、片手で顔覆った。

「ルシヴァ・・・」

ジュリアは慰めるようにルシヴァの方に手を置いたがルシヴァはそれを

払いのけた。

「同情などいらん。」

そう言い残すとルシヴァは部屋を後にした。

ジュリアは部屋を後にしたあともルシヴァのことを考えていた。

蘇り

ジュリアがいる店から出たルシヴァは、また暗い路地を歩いていた。

すると突然耳鳴りのようなものがしたと思ったら

背後に何者かの気配を感じた。

「誰だ・・・」

ルシヴァが振り返るとそこに居たのは牙をむき出しにした女だった。

《こいつ・・・ヴァンパイアか》

シャーッ

女はルシヴァに鋭い爪で襲いかかった。

「あんたがDhampirか。ヴァンパイと人間の混血。哀れな男が。」

ルシヴァは女の爪で左腕に深く切りつかれた。

「俺の後をつけていたのか・・・？」

女は怪しげな笑みを浮かべるとこう言った。

「そうさ。お前を殺しに来たのさ。旦那を殺された復讐にね。」

そう言うと女は再びルシヴァに襲いかかってきた。

ルシヴァは女の首狙い銃を撃った。

「ア————ッ」

弾は、女の右肩を貫通した。

女は激しく叫びながら背中からコウモリのような翼を広げる。

すると空中で一回転し、ルシヴァをかすめて背後に回った。

そしてルシヴァの背中を深く切り裂いた。

「うっっっ……………」

激しい痛みがルシヴァを襲う。

「はははっは！苦しめ。そして死ね。死んだらお前もヴァンパイアになるんだからね！あたし等と同類に。」

《くそっ……………体が鈍る……………》

ルシヴァは立ちあがると女に飛びつき首を絞める。

「あまり調子にのるな、ヴァンパイア。お前の首ひと思いにへし折ってやる。」

「うっ……………ふっ……………Dhampir……………背中が開いてるぞ……………」

「何!?!」

ズボッ

ピチャッ　　ピチャッ

「ぐあ—————ッ……………ぐっ」

ルシヴァは心臓を鋭い爪で突き刺された。

その場に倒れ込むルシヴァ。

倒れこむルシヴァをヴァンパイアは見下し笑いながら言った。

「ハハハッ！苦しいか？しかしお前は死ねぬ、死んでヴァンパイアとなるのだ。アーハハハハッ
哀れだなあ、Dhampir、憎むヴァンパイアに殺され、自らも憎いヴァンパイアとなるのは！
しかしそれも宿命だ！アハハッハハ・・・」

ドンッ

突然ヴァンパイアの背後から銃声の音がこだまする。

「ぐっっっっっ・・・」

苦しむヴァンパイア。

その心臓からは、カランッと弾が落ちる。

そして大量の血が溢れ出す。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ」

激しい叫び声を上げ、ヴァンパイアは、塵と化した。

ルシヴァは微かに見える目で、上を見上げた。

そこにいたのは、ジュリアだった。

「お前・・・なぜ・・・ここに・・・」

ぐっっっっっっ！

あああああああああああああああああああああああああ！」

ルシヴァが突然叫び声を上げ苦しみました。

「ルシヴァ？・・・ルシヴァ！」

ジュリアは突然叫びだした、ルシヴァに必死で呼び掛ける。

ルシヴァは、呼吸が止まった。

「ルシヴァ・・・？ルシヴァ・・・死んじゃ・・・ったの？」

ジュリアの目からは涙が溢れ出す。

短い時間だったがルシヴァと交わした口付けは熱く情熱的で
ジュリアはルシヴァに惹かれていた。

ルシヴァの愛撫に鼓動が速まり、全身が熱くなった。

今まで経験したことが無いような感情を抱いたのだ。

自分も両親を亡くし、ルシヴァもいない。

自分だけが孤独なわけじゃないと初めて知った。

ルシヴァの傍にいたい。

そう思った。

ジュリアはルシヴァの頬にそっと手を添えた。

「まだ名前、教えてなかった・・・グスッ・・・」

するとジュリア手に何かが触れた。

「名前・・・何て言うんだ・・・？」

ルシヴァは一時的に心停止の状態になっていた。

しかし・・・生き返った。

自分が最も憎いヴァンパイアとして。

「ルシヴァ・・・グスッ・・・生きてたの・・・？」

ジュリアは死んだはずのルシヴァが喋りだし驚いた。

「さっき・・・言った・・・ばっかだろ。俺はヴァンパイアになったんだ」

起き上がるルシヴァの心臓は元通りに鼓動を響かせ、傷も塞がっていた。

ヴァンパイアとして生まれ変わったのだ。

「俺にこれ以上近づくな。何をするか分からない」

ルシヴァは立ちあがり、泣き崩れるジュリアに言った。

そして、ジュリアに背を向けた。

「ちょっと待ちなさいよ！」

ジュリアは涙いっぱいの目でルシヴァの前に立ちはだかった。

「どこに行く気？」

「お前の知らないところだ。」

「あたしも連れてって。」

「お前、何言って・・・」

「あたしの名前は、ジュリアよ！・・・それに、あたしがヴァンパイアを倒したんだから！」

ルシヴァは、ジュリアのような娘に初めて出逢った。

こんな強気な女。

こんな小さい体して、根性ありやがる。

思わず、微笑むルシヴァ。

「何笑ってんのよ」

あの抱き合った一時にルシヴァの心にもジュリアの存在が大きくなったのかもしれない。

「でもお前・・・ジュリア、俺はもう人間には戻れないんだ。人間じゃない俺と一緒にいたいっていいのか？」

ジュリアは、涙を拭いた。

「どんなふうになってもルシヴァはルシヴァじゃない。てゆうか・・・外からは人間の色男よ(笑)」

ジュリアは、そういうとルシヴァに抱きついた。

ルシヴァも自然とジュリアをギュッと抱き寄せた。

お互いが初めて人を愛すということを知った。

ルシヴァというヴァンパイアをジュリアは愛し。

ジュリアという愛らしく、強い心を持った娘にルシヴァはあの時惹かれていたのかもしれない。

あの熱い愛撫が二人の心を動かした。

しかし・・・ルシヴァとジュリアはこれからも運命を共にして生きていかななくてはならない。

ヴァンパイアが存在する限り

血が途切れるまで・・・。

繰り返される運命

－5年後－

ルシヴァとジュリアの2人は、小さな村に住んでいた。

2人のことは誰も知らない。

傍から見れば若い新婚夫婦。

ルシヴァもヴァンパイアとはいえ、外見は普通の人間。

誰もルシヴァがヴァンパイアだとは気付かない。

ジュリアは5年経って、ますます美しくなり今は23歳の立派な女性。

そして2児の双子の母親だ。

生まれたのは男の子と女の子。

男の子は、ルーシー 女の子はキャスリンと名付けた。

ルシヴァはあれからヴァンパイアとして血が無くては生きていけぬ体になり森で仕留めた動物の血を飲む日々だったが、

ジュリアが自分の血を飲むよう言った。

シルヴァはためらったがジュリアの強い意志に同意した。

それだけ2人は愛し合っているのだ。

ヴァンパイアになろうと構わない。

愛する人の傍にいればそれで。

2人の子どももまた立派なヴァンパイア。

そしてまた大人になれば、人間を襲い、新しい子を宿す。

ルシヴァは、母親を襲ったヴァンパイアと同じく自分もヴァンパイアとなってしまった。

そして次は自分がDhampirに狙われる。

そして、ジュリアも。

自分の家族が。

ルシヴァとジュリアと同じく、ヴァンパイアの家族がもしかしたら
いろいろな村、町にいるのかもしれない。

しかし、ヴァンパイアという宿命を背負いこれからも生きていかななくてはならない。
誰かに心臓を突きされ、首を切られない限り死ぬことはない。

永遠に生き続けるのだ。

心臓が脈を打つ限り

2人はその道を選んだ。

ルシヴァは、ジュリアに言った

死ぬ時は一緒だと・・・・・・・・・・。

—END—